

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成26年8月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 田 島 知 之

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第25回 国際霊長類学会大会		
発表題目	Difference in mating and reproductive success between two morphs of sexually mature males in free-ranging male Bornean orangutans		
開催場所	ベトナム社会主義共和国・ハノイ・Melia Hanoi Hotel		
渡航期間	平成 26 年 8 月 11 日 ～ 平成 26 年 8 月 21 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有 ( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000 円	
	使用した助成金額	150,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	以下の渡航費用(計153,290円)の一部	
		日本 - ベトナム往復航空券	66,820 円
		空港までの国内交通費	26,080 円
		現地交通費	10,800 円
ホテル宿泊費		25,900 円	
学会参加登録費用	23,690 円		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回、貴財団より助成を受け、海外の研究者と様々な交流を持てたことには大きな意味がありました。ありがとうございました。今後も若手研究者への同様の支援が継続されることを期待しております。		

### 渡航と参加学会の概要

報告者は、ベトナム社会主義共和国ハノイに渡航し、平成 26 年 8 月 11 日から 16 日にかけて開催された第 25 回国際霊長類学会大会に参加し、口頭発表をおこなったのでここに成果の概要を報告する。8 月 10 日に東京へ移動し、翌朝予定通り東京国際空港（羽田空港）からハノイへ向けて出国した。

本大会には 30 か国以上から 600 名以上が参加し、口頭・ポスターを合わせて 900 題以上の発表がおこなわれた。また、1994 年以来 20 年ぶりに東南アジアで開催された大会であったこともあり、東南アジアに生息するテナガザルやオランウータンへの関心が高かったと感じた。オランウータンに関わる発表は 50 題以上にのぼり、基調講演では、野生オランウータンの研究で著名なスイス・チューリッヒ大学の M. van Noordwijk 博士が、オランウータンの特徴であるゆっくりとした生活史戦略について、これまでの研究史を振り返った。オランウータンの野外調査に携わる主要な研究者のほとんどが集まった本大会に参加できたことは、同種を研究対象とする報告者にとって重要であった。

### 発表内容と得られた成果

報告者が発表をおこなったのは、“Research and Conservation of Orangutans in Malaysia”と題されたシンポジウムで、マレーシアにおいてボルネオオランウータンの生態・認知・形態・保全の研究に従事する（報告者を含む）8 名の研究者が口頭発表をおこない、2 名の研究者がそれらに対してコメントを提供した。報告者は“Difference in mating and reproductive success between two morphs of sexually mature males in free-ranging male Bornean orangutans”（ボルネオオランウータンの成熟雄の二型間における交尾成功と繁殖成功の違い）という題名で発表をおこなった。オランウータンの雄には、二次性徴が発達した大型のフランチ雄と、未発達で小型だが繁殖能力のあるアンフランチ雄の 2 つのタイプが存在し、それぞれ異なる繁殖行動をとると考えられている。報告者は、行動観察からこれらの 2 つのタイプの雄の交尾行動について調べるとともに、DNA 分析を用いてそれが実際に繁殖成功に結びつくかどうかについて調べ、小型のアンフランチ雄が雌との交尾に成功していたにもかかわらず、生まれた子のほとんどが大型のフランチ雄の子であった研究結果を発表した。発表後には、他の調査地で同様の研究をおこなっている海外の研究者と、互いの研究結果について討論する機会を持つことができた。その他にも、形態学を専門とするマレーシア・マラヤ大学の T. Lim 博士が提供した、東南アジアにおけるオランウータン属の化石種とその地理的分布についての概論は興味深かった。

コメンテーターのひとりで、マレーシアにおいてオランウータンの保全活動組織 HUTAN を主宰する M. Ancrenaz 博士は、マレーシアにおけるオランウータン研究の成果がこれまでほとんど蓄積されてこなかった問題点を指摘した上で、こうした研究会合を通して研究者間のコミュニケーションをこれまで以上におこなっていくべきだと述べた。オランウータンという共通項を持ちながら、マレーシアの異なる調査地で研究をおこなうため、普段顔を合わすことが難しい海外の研究者たちと直接面識を持ち、互いの研究トピックを披露しあえたことは、本

シンポジウムの持つ意義のひとつであった。

本シンポジウム以外にも、大会会場では、野生オランウータンの各調査地から持ち寄られた最新の知見をもとに盛んな意見交換がおこなわれており、報告者にとってはオランウータンの行動・生態について、今どのような課題が注目を浴びているのか実際に目の当たりにした。これは国際学会に参加しなくてはとても有意義であった。さらに、近年オランウータンの集団遺伝学的研究で多くの成果をあげているスイス・チューリッヒ大学人類学研究所の M. Krützen 博士と直接意見を交換する機会を得たことは、報告者にとって重要な機会だった。博士とは、オランウータンの雄の繁殖成功に関する地域間比較に向けた共同研究の計画について意見を交換することができた。

一方で、報告者自身の英語による発表スキルの不足を問題点として感じた。会期中は多数の発表を聞きながら、どのような発表スタイルが伝わりやすく聞こえるのか、逆に発表をわかりづらくさせる要因は何なのか、そうしたことを考えるチャンスでもあった。日本国内でも、英語で発表可能なシンポジウムやセミナーにこれまで以上に積極的に参加し、次回の国際霊長類学会大会には、聴衆によりわかりやすく伝える姿勢で臨みたいと感じた。

## 謝辞

京都大学教育研究振興財団の助成により、今回このような有意義な学会に参加することができました。心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。



写真：シンポジウム発表者と参加者たち